途絶えた「琉球絵画」学び表現

琉球王国の宮廷画家らが描いた作品を「琉球絵画」と呼ぶことがある。絵師も技法も途絶えてしまっているが、その魅力を知る現在の沖縄の画家が、琉球絵画を復活させる制作や保存に動いている。（上林格）

沖縄

東京・上野の森美術館で沖縄県の画家、仁添まりなさん(28)の9枚組み、幅3・6メートルの大作「火願」（2020年）が展示中だ。全国の新進気鋭の若手画家30人の新作が並ぶVOCA展2021（30日まで）。沖縄の伝統芸能「組踊」上演300周年を記念して一昨年、舞台で再現された装置「からくり物（仕掛け）花火」から着想を得ている。

画面上部にぶら下がるコウモリ。中国で蝙蝠は「福が降る」と吉祥の予兆を示す。右には沖縄のデイゴの花と、一夜だけ咲いて朝には散る「幻の花」サガリバナ。左の墨で描いた松の木と石は、中国絵画の筆法「斧劈皴」でごつごつ感を表した。画面の下部全体には中国産の複雑な形の青い太湖石を配置し、天然の群青で彩色した後に金泥で輪郭線を縁取った。

「楽園がテーマ。中国と琉球、双方の絵画の筆法と吉祥図案を採り入れ、そこに現代のモチーフも組み合わせて現代の琉球絵画にした」

この春、沖縄県立芸術大学大学院の博士課程を終える。アルバイト先の表具工房で琉球絵画の存在を知り、中国画の技法と日本画の構図を採り入れた折衷の面白さにひかれた。博士論文では、中国画と、それをもとに琉球の絵師が描いた絵画の双方を模写して比較した。制作中、模写した中国・清代の画家、章声の「雪中花鳥図」が首里城火災（2019年）で焼失する悲劇にも遭遇した。

火災から1年後に制作した本作は、「火によって失った希望を火によって再興できないだろうか」という願いが題名とともに込められている。

作品は沖縄に伝承するニライカナイ信仰にも通じる。海のかなたにあるとされる理想郷には、天国と地獄が水平軸の中に混在する世界観がある。「楽園の中にも現実的な悲しみや死のにおいが存在する。そこに琉球らしさ、面白さがある」

仁添まりな「火願」（2020年）

王国時代の技に魅了 新作や保存活動

那覇市在住の画家、喜屋武千恵さん(51)が琉球王国時代の絵師、自了（城間清豊、1614～44）の「白澤之図」に再会したのは、社会人になり3年が経ったころ。スランプで絵が描けなくなり自信を失っていた時だった。

学生時代に初めて見たときは「不思議な絵」程度だったが、以前とは違う感動と衝撃を覚えたという。「沖縄の戦火をくぐり抜けてきたその絵に釘付けになった。美しい線描、どことなくユーモラスな表現に魅了された」

日本画と同じ膠絵の琉球絵画を学びたくなり、2001年「失われた琉球絵画の復興」をテーマに中国・瀋陽の魯迅美術院に短期留学した。

改めてスランプだった時期を振り返ると「沖縄で日本画を描くことの違和感があった」と話す。「本土に対してはいまだに見えない境界線を感じる。その中での憤りや、子どもの頃から感じてきた差別される側の感情が、無意識のうちに日本画という言葉に負の感情を抱かせていたのかもしれない」

そんなとき自了の絵に再び会った。「そうした感情を抱える私にとって、琉球王国時代に素晴らしい絵師がいたことを改めて知り、創作を続ける勇気をもらった」

自了を意識した作品制作を続ける一方、琉球王国時代の絵画作品の復元技術も積極的に学んできた。現在、石垣島の旧宮良殿内（国指定重要文化財）にある板戸絵の調査研究事業に取り組んでいる。約200年前、王国時代の行政府「八重山蔵元」に所属した絵師が描いた5枚の板戸絵は、保存状態が悪く、早急な保護の必要性があるからだ。

「足下を掘れ、そこに泉あり」。琉球絵画の存在を知ってからはニーチェの言葉が胸に響く。「グローバル化が進む時代だからこそ、足下を大切に、お互いが違いを認め合い尊重しあえるように」

自了「白澤之図」＝（一財）沖縄美ら島財団所蔵

旧宮良殿内の板戸絵「鍾馗（しょうき）図」＝石垣市教育委員会提供

日本でも中国でもなく 特徴の研究これから

「琉球絵画」の成り立ちや特徴などについて研究者の平川信幸・沖縄県文化財課主任専門員に話を聞いた。

◇

琉球王府が絵師の制度を整備したのは、薩摩侵攻（1609年）後の17～18世紀になる。首里城の整備が進み、王権を示すための壁画や装飾品をしつらえる必要性が生じてきたことと関連がある。

彼らは世襲ではなく登用試験で選ばれた。測量図を作成したり来航する外国船を描いて記録したりする役割もあった。一番大きな仕事は国王の肖像画「御後絵」を描くことだった。

王府は絵師を薩摩藩に留学させて日本画の技術を学ばせていたが、途中から中国・福州にシフトする。署名は唐名を使った。文化的には中国に近いことを示したかったのだろう。ただ、清代の中国南部で明代の花鳥図を学んだためか、中国美術史のなかに琉球の絵師の名は残っていない。

福州に留学した山口宗季（呉師虔、1672～1743）の絵は評判で、公家の近衛家や島津藩から絵画の注文があった。山口家の家譜には「琉球絵画の評判を落とさないように努力した」旨が記録されている。座間味庸昌（殷元良、1718～67）、屋慶名政賀（呉著仁、1737～1800）ら彼の弟子筋も続いたが王朝が滅びると衰え、技術的にも途絶えた。

私も含め現代人が琉球の絵画を意識しだしたのは21世紀に入り、沖縄戦で消失した御後絵の復元事業が始まってからだ。沖縄県立博物館・美術館で開催した「琉球絵画展」（2009年）が画期になった。

何が特徴かと示すのは難しい。同じ琉球絵画を日本画の専門家に見せれば「中国の宮女図の影響だろう」と言われ、中国絵画の大家に見せると「浮世絵の影響がある」と返される。日本でも中国でもない琉球絵画の特徴は、これから研究を深めていかなければならない時期に来ている。